

小学校時代の僕を知る同

級生たちは、どうして急に勉強しだしたのか、不思議に思っていたかもしれない。

成績は、目に見えてあがっていった。少しでも予習をすれば、授業がよくわかるという喜びも知った。学年での順位は順調に上昇していった。それ以上、下にいくことはなかったわけだから、勉強すれば順位があがっていくのは当然だ。やがて100番台になり、130番、80番とあげていく。次は50番に入るためにどうすればいいかを考え始め、弱点を克服した。やがて、40番台、20番とあげていった。

なかでも英語の成績がよかった。というのも、英語は中学からみんな一斉にスタートする科目だったから、小学生時代のハンディもなかったのが大きかったのだ。出だしがよかったこともあって、以降、**僕は英語が好きになった。**

中学校でも何も迷うことなく野球部に入った。

小学校では「喧嘩と野球」が中心だった僕が、中学では「勉強と野球」が中心になった。

1年生は下校時間が17時と決められていたので、練習の途中で1年生だけ先に帰る。でも、僕だけは、

「おい、クワタは残れ」

と監督に言われて、2、3年生と練習を続けた。

練習が終わって、家に帰るともうヘトヘト。そこから食事を済ませると今度は素振りとランニングの自主練習を行っていた。その後がようやく勉強の時間になる。そして朝は6時起床、7時から朝の練習だった。もしかしたら、人生で一番忙しかったのは、あの**中学時代かもしれない**。それくらい、毎日クタクタの日々を過ごしていたものだ。

...

中学時代の経験が、僕に「努力の楽しさ」を教えてくれた。

やればやっただけ成果が出る。

努力を重ねたぶんだけ、結果が出るのだ。

努力は楽しまなければならない。

中学で努力の楽しさに気づけたことが、最終的には僕の野球人生にはとても大きな意味をもつことになった。

その大会で、僕たちのチームは延長戦の末に1対0で負けてしまった。

でも、そのときに清水さんが僕のことを「あの2年生ピッチャーはいいですよ」と褒めてくださったらしく、幸いにして僕は**中学2年生のときに早くもPL学園へ行くことがほぼ決まった**。中学3年のときには、大阪府内外を含めて、20校くらいから誘いを受けたけれど、「PLに行く」という決意は一度もぶれなかった。ほかの学校が出した条件はすごかったことも記憶にある。「桑田君が入学してくれたら、他の野球部員も全員受け入れる準備がある」というところもあったほどだ。そういう条件を出されても、僕は決して揺るがなかった。

中学を卒業した僕は予定どおり、PL学園に特待生として入学し、研志寮での寮生活をスタートさせた。

単調なりハビリを続けるのは、とてもつらいことだった。**手術を受けて成功した人はいるけれど、リハビリに成功した人は少ない**。それは「今日はこのくらいいいや」というほんのわずかの慢心が生まれるからだ。

リハビリを続けて、少し投げられると感じたとき、10メートルの距離から、20球だけのキャッチボールができた。そのとき、僕は小さな夢を叶えたと思った。人間には大きな夢と小さな夢がある。大きな夢が東京ドームで投げることなら、小さな夢は、どんな短い距離でもいいからもう一度、ボールを投げるということだった。小さな夢を叶えていくことが、大きな夢を叶えることにつながる。

プロ野球選手として、手術を受けるというのは「超」のつくマイナスな出来事。手術しなければ、その後、野球ができなくなるわけだから、それ以下はないと言っても過言ではない。でも、それを勲章だと思えるのは、それだけ僕はあのダイヤモンドのなかで、マウンドの上で、ベストを尽くしてきたということ。

いま振り返れば怪我をしてよかったなと思える。今後、僕が指導者として若い世代と向き合っていくとき、彼らの苦しみや痛みを理解し、アドバイスをおくることができるから。怪我をしたときはとてもショックだったが、今ははっきりと言える。怪我は僕にとって、かけがえのない財産であり勲章だ。

先にも記したように、僕は中学2年生の段階で「高校はPL学園に行く」と決めていた。ところが、中学3年生のあるときに先生に呼び出されてこう言われた。

「桑田君が行ってくれば、ほかの生徒も（セットで）受け入れてくれるという高校があるんだ。進学校でもあるし、桑田君、その高校に決めてくれないか？」

「先生、それはできません」

僕は即座に断った。

先生は生徒を送り出す側だから、僕がそこに行けば何人もの進路が片づくから楽なのかもしれない。でも、きちんと子どものことを考えたら、そんなことはできないのではないか。僕についてくる形で自分の実力以上の高校に行ってしまったら、高校でレギュラーを取るの難しいだろう。生徒にとってはとても残酷なことであるし、その生徒の野球人生がそこで終わってしまうかもしれない。僕は丁寧に説明した。

しかし、次に発せられた先生の言葉に、僕は絶句した。

「お前には友情がないのか？」

先生が言う「友情」の意味が理解できず、僕は言った。

「そんなのは友情ではありません。自分に合った学校に行くように勧めるのが友情であり、お言葉ですが、教育じゃないでしょうか」

と返したのだが、

「お前は冷たい男だ。友情がない」

そして、畳みかけるように、

「**お前をPLには絶対に行かせないぞ！**」

とまで言われた。それまで僕は学校の規則をすべて守るようなタイプの生徒だったはずだ。ところがこの進学問題以降、結果的に、

「友達を裏切って自分のわがままでPLに行くという薄情者」

という烙印を押されてしまうことになる。そして学校に居場所はなくなり、僕は中学3年の3学期に別の中学に転校することになった。中学生最後の年の3学期に転校することが、どれほどつらく、寂しいことだったか。約3年間一緒に過ごしたチームメイトに後味が悪い形で別れを告げ、クラスメイトたちにも後ろ指をさされ、僕はひっそりと転校していった。

転校先でも当然居心地は悪い。「何か問題を起こしたから転校してきた」と思われていたのだろう。誰も話しかけてはこなかった。ひたすら下を向いて過ごし、高校進学のとかが来るのを辛抱強く待っていた。

今でもこれだけは言える。

僕の考えは間違っていなかったはずだ。そして僕自身、まったく後悔していない。

このことから学んだ教訓がある。

大人はみんながみんないい人ではないということ。先生は、全員いい先生ではないということだ。

先生だって、友達だって、人間自分が一番かわいい。だから人を利用したり、突然手のひらを返したり、そういうことはあるものなんだ。

清水哲さんという先輩がいる。2章でも書いたが、PL学園に僕のことを推薦してくれた人で、野球部の研志寮で2年間同室でも親身になって面倒を見てくれた一番親しい先輩だ。

僕が2年生だった、1984年の夏の甲子園。

3年生の哲さんは、控えナンバーの12番ながら要所要所でヒットやホームランを打ち活躍した。

卒業後も哲さんは同志社大学に進学し野球を続けていた。

哲さんが大学1年、関西学生野球秋季リーグ戦でのことだ。

一塁に出塁した哲さんは、ヒットエンドランのサインでスタート。そのまま果敢に二塁へのヘッドスライディングを試みた。そのとき、二塁のベースカバーに入ってきた相手選手と激突したのだ。

「ゴキン」

鈍い音がしたようだ。

すぐさま病院に運ばれ、検査をすると首の骨が折れていたため、即手術することになった。僕と清原君と小村監督はお見舞いに行った。

手術は成功した。

でも、首から下は麻痺してしまっていた。寝たきりだ。その後も何度も手術を受けたのだが、**麻痺は治らず今でも車椅子生活**を余儀なくされている。現在は元気に生活されているが、当時は人生に絶望していた。一瞬にして大好きな野球ができなくなるだけでなく、自分の身体を自分でコントロールできなくなり、普通の生活も思うようにできない。

当時、清水さんは、死ぬことばかり考えていた。でも、残酷な話だが手足が動かないのだから、自殺することもできない。

(パイレーツで)

「われわれは、ニコが投げれば結果を残すことはわかった。メジャーでもマイナーでも、結果は出してくれるだろう。正直、右足首を手術したと聞いていたから、ここまでやってくれるとは思っていなかった。でも、**若手に譲ってあげてほしい**。マイナーで結果を残しても、メジャーにあがる可能性はないんだ」

これは、事実上の戦力外通告だった。

「今どき、まだそんな指導者いるの？」

と言われるかもしれないけれど、これは事実である。

なぜなら、僕がアメリカから帰ってきてからも日本全国で頻繁に見かけた指導者たちの姿だからだ。

- ・成長段階の身体に見合わない、無茶で過酷な練習メニューを課すのは絶対によくはない
- ・朝から晩までダラダラと練習を課すことに意味はない。
- ・グラウンドでタバコを吸ったり、昼休みにアルコールを飲んで、指導する人がいる。
- ・四六時中怒鳴って、選手を威嚇しても成長しない。
- ・無意味な発声ばかりが伝統となるチーム

清水

さんがいつも口を酸っぱくして「こういうストレッチを毎日しとけ」と言っていたのを思い出した。あのアドバイスが、大一番に活かされたのだ。そのストレッチというのは、肝を強化するためのものだった。

努力が実を結んだ瞬間だった。

おかげで試合ではアウトローとインハイへ、カーブもストレートもビシビシと決まる。所沢商を相手に6対2で完投勝利をあげ、そのあとも負けることなく、全国の頂点に立つことができた。

この経験は大きかった。**地道に努力を続けていけば、ある日突然伸びるときがある**。僕はこれに気づけたことが本当にうれしかった。この「気づく」というのには能力が必要。PL学園で同じような練習をして、同じように寮で生活しているのにもかかわらず、うまくなる人と、そうでない人がいる。**その差は気づくかどうか**。

(早稲田大学院スポーツ科学研究科)

大学に通ってみて、改めて痛感したことがある。それは、僕は大変な状況や試練が好きなんだということ。わからないことに直面すると学ぶ喜びが湧き上がってくるし、時間的に追い詰められると「よっしゃあ、クワタ、これをどう乗り越えるんだ？」と内なる声が聞こえてくる。おそらく僕は、こういう試練を乗り越える自分を見たいんだと思う。

大学に入って、まず最初の試練は「パワポ」だった。

合格通知を受けたあと、その夜に大学からメールが届いた。

「明後日、合格者だけ集合します。そこで自己紹介してください。パワーポイントで各自5分でお願いします」

と、そこには書いてあった。

パワーポイント……ってなんや！

あわてて知り合いに電話をした。

「パワーポイントって何？」と。

桑田真澄

1968年4月1日生まれ

大阪府八尾市出身

身長 174cm。

体重 80kg。

血液型 AB 型

右投げ右打ち。

PL 学園高校では1年生からエースとして活躍。

1年夏、2年春夏、3年春夏と5大会連続甲子園出場。

2度の優勝、2度の準優勝、1度のベスト4。

甲子園通算 20 勝は戦後最多勝利

甲子園通算計 6 本塁打も同期・清原和博の 13 本に次いで史上 2 位の記録。

1986 年 PL 学園からドラフト 1 位で巨人に入団 (背番号 18)。

2006 年巨人を退団。ビッツバーグ・パイレーツとマイナー契約。

2007 年 6 月メジャーリーグ月格 (背番号 18)。

2007 年 8 月パイレーツ退団。

2008 年 3 月 26 日に現役引退を決意。

2009 年 4 月早稲田大学大学院スポーツ科学研究科に入学、

2010 年 3 月に総代首席で卒業。